

すみよし





聖 句



み言葉の内に命があった。
この命は人間の光であった。
光は闇の中で輝いている。
闇は光に打ち勝たなかった。

ヨハネによる福音書
第 1 章 4-5 節
選：ルドヴィコ茨木
M.M.



[目次](#)

《 復活の信仰に生きる 》

傘木 澄男 神父

あの東北大震災から六年経ちました。先日、津波に吞まれて海に流された肉親の遺体を探すために潜水夫の資格まで取って、今も海に潜り続けている一人の男性の姿を、テレビの映像で見ました。未だに二千五百人もの方行方不明の犠牲者がいるということですが、同じ想いで探し続け、待ち続けている大勢の遺族の方たちがおられることでしょう。何千何万の人を殺し国土を壊滅させる大地震や津波だけではなく、集団殺戮や残酷な戦争、飢饉や暴力などによる無数の人々の死。これら全てにおいて、神はどこにおられるのでしょうか。これにどう答えられるのでしょうか。

神の答えは、復活にあります。イエスの復活と、私たちにも約束されている復活に。私たちは必ずしも災難や不幸から救い出されるわけではありません。自然災害はただ自然災害で終わり、悪はただその為す事を為すだけです。イエスが友ラザロを、神がイエスを死に任せたように、神は愛する者が苦しんで死んで行くのに、いちいち介入されず、奇跡もなさいません。しかし神は後で私たちを贖（あがな）い復活させ、こうしてより深い、より永久的な次元で私たちを取り戻し擁護されるのです。

これが真実であることは日常の経験によっても証しできます。初めはどう見えていても、最後には愛は憎しみに、平和は争いに打ち勝ちます。赦しは恨みに、希望は悲観に、命は死に、善は悪に打ち勝つのです。「いつの世にも真理と愛の道が勝利した。悪はいつとき無敵と見えても、最後には必ず滅んだ」とは M.ガンジーの言葉ですが、これこそ復活が最も力強く告げていることです。神が最後の言葉を持っておられます。イエスの復活がその言葉です。敗北と死の廃墟と見えたものから、より深い新たな命が、永遠の命が絶え間なく湧き出てきます。私たちの信仰は、イエスの死に対する神の沈黙の内に終わるかに見えますが、実は正しくそこから始まるのです。ですから私たちは何よりもまず、この真理を信頼し受け入れて、これに自分の人生を賭けなければならぬのです。

この様に言いますと、「復活は実際に起こった事実ではなく、経験に基づく悟りや、新たな生き方への希望の次元のことなのか」という考えを抱かせるかもしれません。実際、「復活信仰は人間意識の内部に起こった何らかの体験から生まれて肥大化し、やがて事実と信じられるようになったものに過ぎない」などと言う人がいました。しかしその様な受け止め方は全く根拠のない誤りと言うべきです。聖書は、イエスが実際に死から命に甦って弟子たちに現れ、彼らに触らせたり魚やパンを食べて見せたりして、ご自分が幻でも想像の産物でもなく生前のからだと同じものであることを証明されたことを、また、ご遺体が無くなって墓が空だったことを繰り返し証ししています。

しかも聖書は、キリストの復活によって人間だけでなく世界も救われて変容したのだ、と言います。聖パウロが「被造物は虚無に服しているが、いつか滅びへの隷属から解放されて神の子供たちの栄光ある自由に与れるよう、共に呻き、共に産みの苦しみを味わっている」と書いている通りです(ロマ 8:20-22)。世界も神の造られたもので、人間とは独立にそれ自身の価値を持ち、人間と永遠を共にするよう定められて、自らも救いを必要としているのです。

復活は確かに人間の希望に関わることですが、私たちは復活を主観的精神的な体験の世界に閉じ込めておくのではなく、飽く迄もそれを神の計り知れない永遠のご計画の中で起こった実際の出来事、触ることのできる現実の事実として認めなければならないのです。

とは言え、人々が復活を人間の身体や物理的な世界の根元的な変容として自然に受け入れることのできた聖書時代という信仰の時代と異なり、科学的な考えに漬かり切った現代の人々に、復活の信仰を分かって貰うために、また私たちがそれを固く保ち続けるためにも、絶えず復活を聖書によって正しく捉え直して行く必要があります。復活は実際どういう体験、どういう事実だったのでしょうか。弟子たちは復活したキリストとの不思議な出会いを体験し、それに照らして旧約聖書の言葉や生前のイエスの教えと業の数々を思い起こし、考え、理解して、漸くこの体験を全く新しい事実として受け入れて信じるようになりました。「神に捧げ尽くされたイエスのご生涯は、挫折したのではなく、父なる神に受け容れられて永遠のものとなり、復活者キリストとして今も私たちの中に生きておられるのだ」、こう確信して彼らはこれを「イエスの復活」と呼んだのです。復活を信じるとは、人の一生を挫折で終わらせず永遠のものとして下さる神を信じることです。世の人々が復活を「信じられないことだ」と言うのは、遺体が生き返ることだと思うからです。

聖書で「からだの復活」と言う時、「からだ」とは肉体のことよりも、人格である人間存在そのものを指しています。肉体の細胞は全て代謝して入れ替わりますが、常に同じ人格です。「これは私のからだである」とイエスは言われますが、それは「私の肉体である」ではなく「私である」と言う事です。復活は、生涯全体を担う霊肉一体の人間存在としての私自身が、丸ごと永遠のものとして神に受け容れられて、新しい命の有り方に入れられることに他なりません。こうして教会と共にイエスの復活を信じる私たちは、そのイエスと結ばれて生きる私たち自身の復活をも、素直に信じていくことができるのです。



目 次



☆	聖句	ルドヴィコ茨木 M.M.	・・・	1
☆	巻頭言	傘木神父	・・・	2-3
☆	目次		・・・	4
☆	四旬節黙想会	大久保 武神父	・・・	5-6
☆	シリロ神父様、お帰りなさい！！		・・・	7
☆	住吉ニュース		・・・	8-9
☆	こどものいのちを守るために	Y.K.	・・・	10-11
☆	タイ研修ツアーに参加して	A.S. Y.W.	・・・	12-13
☆	ユスト高山右近列福ミサ		・・・	14-16
☆	図書コーナー	(サンパウロ) 阿部 真理	・・・	17-18
☆	(信徒動静)教会日誌		・・・	19
☆	後記		・・・	20

題 字 J.Y.

表紙絵 1961 年（昭和 36 年）掲載

お知らせ

4 月 12 日に行われた司祭金祝（サンミゲル神父）銀祝（パウロ神父・ブラッドリー神父）の様子は次号で詳しくお伝えします

【四旬節黙想会】

2017・3・5

指導司祭 大久保 武神父

春まだ浅い 3 月 5 日に大久保武神父様をお迎えして、四旬節の黙想会が行われました。大久保神父様は 2013 年 3 月 20 日に大阪カテドラルで司祭叙階され、現在は鈴蘭台教会に居住して中ブロックの司祭として活動されています。住吉教会には助祭として一度集会祭儀に来られ、今回は司祭として初めてのミサと黙想会となりました。



～ミサ中の説教から～

四旬節第 1 主日である今日の福音書（マタイ 4 章 1 ～ 11）はイエスが悪魔からの誘惑を退けるお話です。

- ① 石をパンに変えろと言われ・・・→ 「人はパンだけで生きるものではない」
- ② 神殿の屋根の端から飛び降りろと言われ・・・→ 「あなたの神である主を試してはならない」
- ③ ひれ伏してわたしを拝むならこれをみんな与えようと言われ・・・→ 「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」と答えられました。

この 3 つの出来事は私たちの人生の中で、出来れば避けて通り過ぎたい受難です。イエスの受難の苦しみは私たち日本人の生病老死の考え方と通じるところがあると思います。

それは又私たちの信仰の歩みを試されてもいるのです。

飢えをしのぐために人をだましてでもパンを得ようとしたり、無病息災で日々を過



ごせば神を信じる者となり、権力を得るために自分の欲望のままに行動してトラブルを起こすなどは信徒の姿ではありません。

いつも神のみ旨とそのはからいを信じて、たとえ苦しいことや災いに巻き込まれても、それを乗り越える力をお与えくださいと祈りましょう。

[目次](#)

～黙想会講話～

祈りと沈黙

祈りはいつでもできます。ただ祈りを心ゆたかなものとして成立させる条件としてその土台となる沈黙が必要です。

沈黙は「沈む＝心の深いところに入る」と「黙する＝だまる」です。

沈黙は日常生活が人とのコミュニケーションでなりたっていることから分かるように、非日常の状態です。祈るためにはその非日常の状況を作る必要があり、体も心も沈黙するのです。



体の沈黙は睡眠です。刺激を受け続ける昼間のつらい状況から解放されて眠りにつき、次のエネルギーを蓄えるのです。

心の沈黙はそれを得るために出来るだけ周りからの刺激を遠ざける。即ち心の整理をして、考える余裕をもつこと。そうして出来れば誰からも干渉されない、誰も人のいない場所を選んで祈る。

祈りの対象は三位一体の神であり、神とだけ対話する。外からの刺激で神から意識がそれないようにして、神のいつくしみを味わい、神への信頼を新たにします。そのためにもみ言葉を知り、神からのメッセージ（福音）を知ることが大切です。

ミサの時に大勢の人がいる中でも沈黙して祈ることが出来るのは、神と対話するという共通の目的があるためです。決まった祈り（主の祈りやアヴェ・マリアなど）を唱えるときにも、一つひとつの文言をかみしめて、考えながら祈る。そのためにも沈黙が必要です。

沈黙の祈りの理想的な場所は緑に囲まれたひと気のない大自然の中ですが、自分の身近な場所、例えば空いている時間帯の教会のなか、人の集まる公園や図書館、電車のなかでも工夫して沈黙の状態を作り出して祈ることが出来ます。

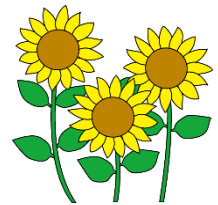
四旬節はイエスの受難を思い、自分の人生を省みて神により頼み、神への信頼を深めるようにしましょう。

（編集部）

《シリロ神父様、お帰りなさい！！》

3 月 26 日の四旬節第四主日のミサは、5 年ぶりに来日されたシリロ神父様と傘木神父様の共同司式でおこなわれました。5 年も経ったとは思えないほどお変わりなく、いつもの優しい笑顔の神父様とミサ後、たくさんの方たちがお話をしたり、一緒に写真撮影をしたりで、あっという間に楽しい時は過ぎてしまいました。子供たちや青年たちに「大きくなったね」と嬉しそうにお声を掛けられるお姿に、住吉在任中のミサ中、祭壇で子供たちと手をつないで主の祈りを唱えておられた光景がよみがえりました。

シリロ神父様、いつまでもお元気で、そしてまたお目にかかれることを一同心より願っております。



ブラッドリー神父様は復活祭後、大阪梅田教会に転任されます。
お別れの記事は次の被昇天号に記載する予定です。

[目次](#)



住 吉 ニ ュ ー ス



1 月 8 日（日） 傘木神父司式によるミサの中で住吉教会で育った 4 人の青年が成人の祝福を頂きました。残念ながら、お一人は出席がかないませんでした。メッセージを届けてくださり、三人のご挨拶と共に披露されました。教会の皆さんに見守られて立派に成長した新成人たちに神様のお恵みが満ち溢れますように！！
続いて、新年会のパーティーが催され、三人の新成人による信徒お手作りのケーキのケーキカットも・・・。

歓談の内、楽しいひと時を皆で過ごすことができました。



左から、S.T.さん、K.S.さん、S.K.さん、
(A.Y.さん)

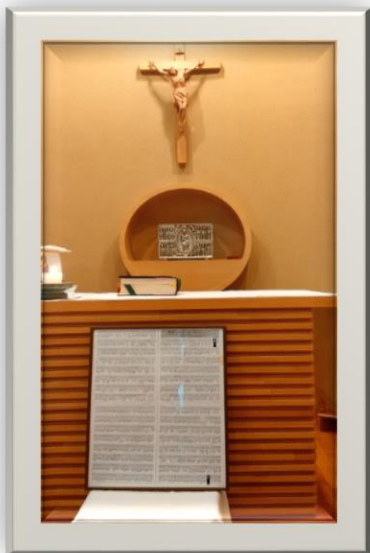


新年会で歓談



1 月 17 日（火） 阪神淡路大震災発生から 22 年のこの日、9 時 30 分から住吉教会でも追悼ミサがペンケレシ神父司式で行われました。

この震災で犠牲となられたすべての方を想い、
愛する人をなくされた方、困難の中にある方の上に主の豊かなお恵みがありますように。



2 月 5 日（日） 住吉教会の守護聖人である聖パウロ三木のお祝い、ブラッドリー神父の司式によるミサの中で聖パウロ三木ら殉教者のために「日本二十六聖人殉教者への祈り」を捧げました。ミサ後、恒例のおぜんざいがふるまわれ、皆さん心も体もほっこり温まるひと時を過ごしました。



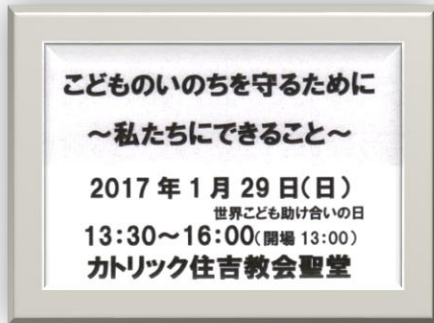
3 月 4 日（土） 教会学校の遠足は保久良山、岡本梅林でした。好天の下、きれいな梅の花を背景に、子供たちは思いっきり駆け回って楽しい時を過ごしました。



《こどものいのちを守るために～私たちにできること～》

1 月 29 日（日）住吉教会聖堂で、3 年ぶりに神戸地区社会活動委員会（シナピス神戸）主催の学習会が開催されました。

新聞テレビ等で報じられる驚愕のニュースに、私達に出来ることがあるのか、どのような問題があるのか・・・諸問題に関わっておられる方々からお話を伺いました。



【講師 1】 島田妙子さん

児童虐待防止機構理事長

兵庫県児童虐待等対応専門アドバイザー



4 才の時、両親が離婚し兄 2 人と児童養護施設に入所。小学 2 年の時、父が再婚し引き取られたが、そこから壮絶な虐待がはじまりました。タバコの火やアイロンを押し付けられた等々。中学 2 年の時の担任教師が異変に気付き、再び施設に戻った時、「もう一度人生をもらった」と思いました。

その後継母と離婚した父親が「とにかく悪かった」と施設に電話をかけてきた 1 週間後に自殺しました。心の支えだった 1 才上の兄が「人の役に立ちたかった。自分の分まで頑張してほしい」との言葉を残して白血病で亡くなった事で、虐待の記憶を封印していた考えが変わりました。

「父のように自分の力で戻れないところまで追い込まれる前に、誰かに気持ちをぶつけて」と呼び掛けて、誰の中にもある怒りや感情のコントロールを、トレーニングによって抑える方法を伝え、一人でも多くの親や子が救われるようにと全国を飛び回っています。

【講師 2】 橋本佳代子さん 看護師（北播磨総合医療センター女性病棟勤務）

加古川市の病院の内科小児新生児病棟で 30 年の臨床経験を経て、現在、加古川市役所の赤ちゃん訪問事業に携わっています。



訪問の第一目的は、健全な育児が出来ているか、潜在的虐待がないかで全国の市区町村で行われています。

「叱り上手、ほめ上手、子育て上手、笑顔上手」のパンフレットを渡し、上の子と下の子を比較してしまう母親には、

子供の生きがいや能力を伸ばす手助けをする話をしたり、成長していろいろ諸問題をかかえ思うようにいかなくても、「生まれた時のかわいい、うれしいという気持ちを忘れないで子育てしてね」とお伝えしています。

【講師 3】 森田喜治さん 龍谷大学文学部 臨床心理学科教授

20 年間施設で虐待を受けた人達の心理治療をしています。 阪神淡路大震災の時や、台湾、中国、バリ島の被災地にも行き、トラウマを抱える人たちのカウンセリングをしてきました。

今日は「虐待とはなにか」というテーマでもあります。

自分の子供の時はどうだったかと思えば、かなり厳しい父親から風呂や押し入れに閉じ込められたり殴られたりしたが、それは「その時代の中での文化」として認められており虐待ではなくしつけであったように思います。

今の学生の「他者の目を気にし、点数を見て枠の中でしか行動出来ていない」又、「ゲームの仮想空間に振り回されている」姿を見ていると、どんな未来になるのか危惧してしまいます。

昔の母親には井戸端会議というコミュニティーがあり、人間関係がありました。都会と地方では人の関わり方が違うかもしれないが、日本の中でそれぞれの文化が違って子育ては一人の人間を育てる大切な事であり、皆で協力しあう構造の大切さを忘れないでほしいと思っています。



※ 最後に大阪難波で数年前に起こった、ネグレクト（無視され放置された状態）で、幼い姉弟が餓死した事件のその後のお話がありました。そのマンションは夜の仕事をしている人が殆どで、子供を育てている人もいます。

21 歳の女性の「声を掛け合い、見回りをしよう」との呼びかけで、協力しあう動きが出来ていると話されました。重いテーマに身構えて参加した学習会でしたが、小さな灯りを見つけたように少しホッとして終わる事が出来ました。

社会活動チームリーダー Y.K.

[目次](#)

《タイ研修ツアーに参加して》

2017 年 2 月 27 日～3 月 10 日

A.S.

ゆっくり、ゆっくりと流れる時間。ただ何もせず空を見つめて過ごす時間。それらの時間は決して退屈な時間でもなければ、無駄な時間でもない。その時間は私だけのもので、今ここに私が「生きている」ことを実感させてくれる時間。そんな不思議な時間に、大自然に囲まれた小さな村ナキヤン村で出会いました。その時間の中で私が気づけたことは周りにある小さな「幸せ」と私の中にある「信仰心」です。

おしゃれをして、美味しいレストランを探して、綺麗なイルミネーションを見て。それらが日本で過ごしていて私が幸せだと感じることで、自分がそう感じるために時間をかけていました。しかし村では違いました。目的もなく散歩をしていると出会う美しい自然、笑顔で駆け寄ってくる子どもたち。月の光が明るいと感じられるほどの暗闇の中の夜空に広がる満天の星空。何か特別なことをした覚えはないのに、ふと「幸せだ」そう感じていました。それだけではありません。言葉は一切分からないけれども笑顔で話しかけてくれる村の方々や、誕生日にはおめでとうと言ってくれる方々。自分から幸せを探しに行かなくても、私の周りにはたくさんの幸せがあり、日本での生活の中でもたくさんの小さな幸せに囲まれていることに気づくことができました。

そしてもう一つの信仰心。普段は教会にもなかなか行かず、自分がキリスト教徒であることに自覚もあまりありませんでした。それとは打って変わり、朝晩の祈り、毎日のミサ、静かに祈る時間など、国も言葉も生活も違うナキヤン村の方々と共に分かち合える時間が私の中にある信仰心を思い出させてくれました。彼らが大切にしている信仰は純粋に美しいと感じ、自分の信仰を新たにすることができました。お互いの信仰心を尊重しあえる仏教国タイ、この国が微笑みの国と呼ばれる理由がわかったような気がします。

水を浴びたり、辺りに生えている果物をそのまま食べたり、鳥を持って帰ったり。表面的にはかなり都会の暮らしに比べ、不自由に思えるかもしれませんが、この生活の中で私の忘れ物をたくさん見つけることができました。不安も多かったツアーでしたが、今では村での生活が恋しいほどになりました。あの村にはもう一生訪れることはないかもしれないです。けれどもナキヤン村はいつまでも忘れられない私の故郷の一つです。私にたくさんのことを教えてくれたナキヤン村にこれからも神様の祝福がありますように。ダブル！（カレン語でありがとう）



2/27～3/10 念願のタイに行ってきました。

Y.W.

今までの人生観が 180 度変わる本当に素晴らしい経験をさせていただきました。チェンマイから車ででこぼこ道を 6 時間？くらいの本当にこんなところに人が住んでいるのだろうか、と不安になるくらいの山奥のカレン族の村(チェンマイ県オムコイ郡ナキヤン村)でホームステイをしました。



その村での生活は車の荷台に乗って風を感じながらドライブしたり、朝ニワトリの鳴き声で起こされたり、人のおうちに自由に行き来して時間を気にせずのんびり談笑したり、ご飯を食べていたら猫とニワトリが隣で同じものを食べていたり、普段なら出ないような大声で叫んだり、トイレは用を足したら自分で水で流したり、お風呂はその名の通り水浴びで、変な木の実を子どもに食べさせられたり、食事をいただけることに心から感謝したり、夜には満天の星空を見たり、毎日新鮮で刺激的でしあわせな時間でした。

日本は物資に溢れているばかりに複雑で、競争社会の中で大切なものが見えなくなり、生きるのがつらくなることもあります。でも今回この村で豊かな自然と共存することを大切に、他人に対して敬意を払い生きる人々と生活を共にし、身構えることなく解放されて自分に素直に生きること、シンプルに単純に生きることがいかに本当のしあわせかを身をもって知ることができました。

またいつの日かの分かち合いで信仰について深く考える機会がありました。日本ではどうも胸を張って信仰宣言をできないのが現実です。しかしタイではすべての人が何らかの宗教を信仰し、それぞれ宗教が違ってもお互いの信仰を受け入れているそうです。「どんな信仰でも構わないから何かを信じて生きることが何よりも大切」この言葉はそんな感覚を持たない日本人にとってとても深く染み入りました。また、私自身幼児洗礼で確固たる信仰心を語れるほどではなかったけれど今回の旅に参加し素晴らしい経験をする事ができたのも、あとを辿れば私にも両親が洗礼を受けさせてくれたおかげだという考えも吸収できました。

最後にこの素晴らしいお恵みの旅を計画し、お世話してくださったすべての方々とは事故なく無事にこの旅を終えられたことを心から感謝いたします。

また来年も参加することを強く心に決め、このツアーを通して自分がこれから生きる道をあらためて見つめなおしたいと思います。



《ユスト高山右近列福ミサ》

2017 年 2 月 7 日（火）12 時より大阪城ホールにてユスト高山右近列福式が、
主司式：教皇フランシスコ代理：アンジェロ アマート枢機卿（教皇庁列聖省長官）

共同司式：ルイス アントニオ タグレ枢機卿（マニラ大司教）、ジョゼフ チェノットウミレヴム名義大司教（駐日教皇大使）、ヨゼフ高見三明長崎大司教（日本カトリック司教協議会会長）、トマス アクィナス前田万葉大阪大司教（同

副会長）ペトロ岡田武夫東京大司教（ユスト高山右近列聖請願者）の下、国内外から聖職者、信徒他約 1 万人の参列者で荘厳に行われました。

（住吉からは聖歌隊他で約 30 名の参加。）



鐘の音と共に開式



思い返せば 2015 年 2 月 3 日、神戸文化ホールにて「高山右近帰天 400 年記念ミサ」が、マニラ大司教と駐日教皇大使ご列席の下行われ「右近忌やフィリピンジャパンつなぐミサ」の句と共に前田大司教が列福に向けての思いを語られて 2 年・・・列福委員会発足時からお力を注がれた今は亡き田口大司教、溝部司教もどんなにお喜びの事でしょうか。2012 年 6 月 9 日、住吉教会からの京都巡礼のおり溝部司教の西陣教会を訪問。キリシタン時代の信仰、殉教についてお話し下さり、高山右近の列福に向けての希望を語られ、大切に保管されている遺物のご説明を受けました。（2012 被昇天号に訪問時のご講話「殉教者の霊性を生きる・キリストの後ろ姿をみつめて」が掲載されています。）

「いつくしみ深く御父のように」（いつくしみの特別聖年公式賛歌）と共に始まった列福式の司式長は、パウロ セコ神父。住吉教会でご指導下さった日々が思い出され、なつかしさのうちに大変なお役目でご心労はいかばかりかと推測しました。素晴らしいお働きに感謝です。列福の儀では「列福の請願、高山右近の略歴紹介、教皇書簡の朗読、肖像画の除幕式、聖遺物の安置」に続き Sr.前田智晶作詞作曲の「主こそわが光」が京都洛星中学・高等学校、ノートルダム女学院中学・高等学校、合同オーケストラ演奏で歌われ「大阪や イテ ミサ エスト 冬の虹」の前田大司教の句、数か国語の祈りの共同祈願や各国リズムの聖歌と共に、全てが今日の喜びの日の為に準備されたもの、福者ユスト高山右近の信仰をたたえる心でした。



右近の聖遺物へ報告

共同祈願



日本には 42 名の聖人と 394 名の福者が認定されています。その全ての方々が酷な弾圧に耐え殉教された事を思う時、ゆるぎない信仰の姿を知り、後に続く私たちに信仰の自由に守られた平和な国を残す礎となって下さったのだと感謝するばかりです。信じ切られたパライソで主の元に平安を得られ、日本の信仰の在り方を見守って下さっているのではないのでしょうか。



イテ ミサ エスト
(行きましょう。主の平和のうちに)



司式の模様は全世界に同時中継されており、カトリック中央協議会 HP や YouTube 高山右近列福式でイエスのカリタス修道女会の Sr.前田智晶、長崎 26 聖人記念館館長レンゾール ルカ神父の解説と共にご覧になれます。

(＊写真は列席の住吉教会信徒撮影のものと、公式HPの動画より編集しました)

—列福式を前にして各教会で唱えた共同祈願—

列福式を迎えるユスト高山右近は、人生の途上において、自身はもとより、家族、家臣の運命を問われる岐路に度々立たされた時、社会的常識や価値にとらわれることなく、主のみ声に聴き、その招きに応える生き方を貫きました。主よ、複雑な現代社会を生きる私たちが、様々な困難や誘惑に出会う時、降りてこられたキリストと出会ったユスト高山右近の生き方に倣い、み声に聴き、み旨を悟り、従う道を識別して生きることができるよう、私たちの信仰を強めてください。

2017 年度の年頭に前田万葉大司教は、今年は「右近のいつくしみに倣う」を目標にと話されました。「すみよし」でも、「列福式」の記事にはじまり一年を通して書籍の紹介や、書籍を読んでのわかちあいなど、「右近の霊性（いつくしみ）に倣う」をテーマとした記事を記載していきたいと思います。（編集部）

[目次](#)

《図 書 コーナー》

ヨゼフ 阿部真理（聖パウロ修道会）

1 『キリシタン大名 高山右近とその時代』

教文館 川村信三著

わたしたち教会は、今年 2 月 7 日、大阪城ホールにて、高山右近の列福の恵みをいただきました。高山右近に関する書物は、列福を間近に、たくさん出版されました。この本は、イエズス会司祭であり、日本のキリシタン研究の第一人者である川村信三神父によるものです。また著者は、NHK 大河ドラマのキリスト教歴史考証にも携わっており、これは、その著者による本格的な福者高山右近の評伝です。

著者は、過去に出版された、たくさんの高山右近伝をふまえて、その上に、新しい試みとして、福者の生きた時空を俯瞰（ふかん）することから右近像を、書き進めます。右近に親しみ、右近の信仰に倣い、キリストに生涯をささげた福者高山右近の歩みを共にすることは、私たちにとっても、まさに、キリストに従う道をたどることにもなるでしょう。



2 『いつくしみの教会』

明石書店 教皇フランシスコ著 栗栖徳雄訳



世界のカトリック教会を導いておられる、フランシスコ教皇様は、就任以後、全世界を回り、「人々と共にともに」歩む教皇としてすべての人に愛され、慕われ、尊敬されています。特に小さき人々のもとに自ら出かけ、寄り添う姿はとても感動的です。

本書は、その教皇様が全世界のあらゆる場所、あらゆる世代で話され、寄り添われた講話を収録しています。代々の教皇、聖ヨハネ パウロ 2 世、ベネディクト 16 世とはまた違ったスタイルで私たちの心に語りかけることでしょう。その文体は、あえて難しい神学的な用語は避けています。一つの項目が 3 ページほどでまとめられ、とても読みやすいものになっています。ただ、その

内容は神さまの愛と優しさ、またイエスの代理者としてのお父さんのような深い愛情に包まれています。サブタイトルの「共に喜び、分かち合うために」とあるように、何人かで分かち合うのも良いでしょう。

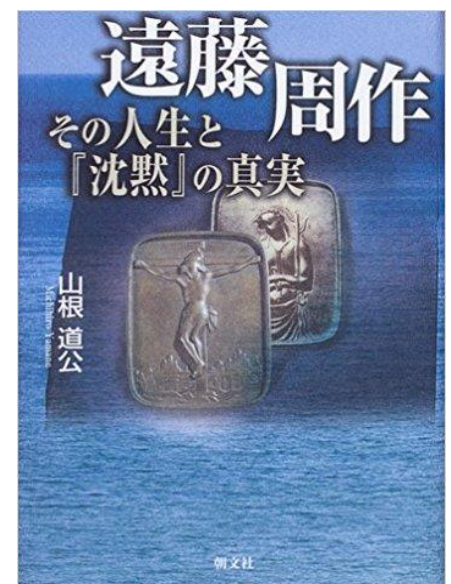
参考までに、中の小見出しを少し紹介しますと、「キリストの福音」、「貧しい人のための貧しい教会」、「聖霊の声を聴く」、「告げることとあかしすること」、「フルタイムのキリスト者」、「最も恵まれていない人々のために」など、信仰生活、教会生活に役立つ講話でいっぱいです。

3 『遠藤周作 —その人生と「沈黙」の真実—』

朝文社 山根道公著

今年の1月後半から全国で上映され、話題となっている遠藤周作原作の「沈黙」をごらんになった方もたくさんおられると思います。本書は、この重く、あるいは逆に光り輝く「沈黙」のテーマを、遠藤周作の母親・郁、親交のあった井上洋治神父、そして、踏絵、棄教、日本人のキリスト観などいろいろな観点から「沈黙」を読み解いていきます。大きさの割には高価な本なので、なかなか手にされる方は少ないと思います。沈黙の原作を読み、映画を味わう、また、その逆もあるでしょう。

いずれにせよ、私たちキリスト者にとって避けることのできないこのテーマを味わって見てください。そして、神に従うとは、神を愛するとは、何が大切で、何が本質なのかを、あらためて考えることは大切なことだと思います。



[目次](#)

《教会日誌》

- 1 月 1 日 (日) 新年ミサ (神の母聖マリア・世界平和の日)
- 8 日 (日) 新成人の祝福・ミサ後、新年会をかねて新成人お祝い会
- 17 日 (火) 阪神淡路大震災追悼ミサ
- 21 日 (土) 教会学校始業式
- 28 日 (土) Come & See
- 2 月 5 日 (日) 聖パウロ三木お祝い会
- 7 日 (火) ユスト高山右近列福式
- 25 日 (土) Come & See
- 3 月 1 日 (水) 灰の水曜日
- 5 日 (日) 四旬節黙想会 (指導司祭 大久保 武神父)
- 18 日 (土) 教会学校卒業式・終業式
- 25 日 (土) Come & See
- 4 月 8 日 (土) 教会学校始業式
- 9 日 (日) 受難の主日 (枝の主日)
- 13 日 (木) 聖木曜日 (主の晩餐)
- 14 日 (金) 聖金曜日 (主の受難)
- 15 日 (土) 聖土曜日 (復活徹夜祭)
- 16 日 (日) 復活の主日・洗礼式・初聖体・お祝い会

《編 集 後 記》

この度ユスト高山右近の列福式と感謝ミサが荘厳に行われ、その様子をユーチューブで拝見致しました。改めて右近の足跡を辿ってみると意外にもこの近辺に居を構えておられたのですね。明石（船上城）、淡路島、小豆島、室津などです。

多くの人々を信仰に導き、一城の主（あるじ）であったにもかかわらず、禁教令によって城を追われ、無一文の生活を余儀なくされた困難の中、命をかけて福音に生き、長い暗やみ（迫害）から光（復活）への道を歩みぬいた福者右近の靈性に少しでも近づけたらと思います。

M.M.

イースターおめでとうございます。毎年復活祭の御ミサでは住吉教会で洗礼を授かりました時の事を思い出しております。アインシュタインの名言だとされている「Coincidence is God's way of remaining anonymous」（偶然とは名前を前に出されないで働かれる神様の御業）の言葉通り、日常の生活で偶然にしてはあまりにも不思議な出来事や出会いに驚く事があり、神様のお働きではないかと感じる事があります。私たち一人ひとは数多くある教会の中で住吉教会にそれぞれ導かれて、時には懐かしい方々と再会し又は新しい出会いにより友情と繋がりのお機に恵まれています。神様のお計らいで集められた私たちが共に祈り集う事が出来ます大きなお恵みと喜びに感謝致しております。

A.M.

教会案内

ミサ

主日ミサ	日曜日	9:30
	第1・第3土曜日	19:00
	スペイン語	
週日ミサ	火・金曜日	9:30

講座

信仰講座 (Fr. 傘木)	Fr. 傘木担当日曜日	10:50
信仰の分かち合い	第2・第4日曜日	11:00
聖書の集い	Fr. 傘木ミサ担当金曜日	10:15
Come & See	第4土曜日	15:00

教会学校

	第1・第3土曜日	14:00-16:00
	対象：小学1年生～6年生	

評議会

	第3日曜日	11:00
--	-------	-------

野宿者支援炊出し

	第1土曜日	9:30
	(住吉教会集合)	



「すみよし」第201号

発行日	2017年4月16日
発行責任者	ブラッドリー神父/コンスル神父
編集・印刷・発行	広報チーム
発行所	神戸市東灘区住吉宮町2-18-23 カトリック住吉教会
TEL	078-851-2756
FAX	078-842-3380
	http://www.sumiyoshi.catholic.ne.jp